

# 上五島を中心とした西九州のカトリック教会堂にみられる植物紋様の多様性

山口裕文<sup>1</sup>・大野朋子<sup>2</sup>・歌野 礼<sup>3</sup>

<sup>1</sup> 東京農業大学農学部

<sup>2</sup> 大阪府立大学生命環境科学研究科

<sup>3</sup> 元新上五島町議 (現自由館経営)

e-mail: h4yamagu@nodai.ac.jp

## Diversity of Plant Deformation Designs in Catholic Churches in Kamigoto and in Surrounding Western Kyushu

Hirofumi YAMAGUCHI<sup>1</sup>, Tomoko OHNO<sup>2</sup> and Aya UTANO<sup>3</sup>

<sup>1</sup> Tokyo University of Agriculture,

<sup>2</sup> Osaka Prefecture University,

<sup>3</sup> Councilor of Shin-Kamigoto Town (\*Present, Jiyukan Owner)

### Summary

This research revealed the diversity of floral and plant deformation designs in Catholic churches in Kamigoto and Nishikyushu areas based on the authors' actual field surveys from 2011 to 2013. The walls, ceilings, windows, bosses (rib-joints), and pillar terminals of churches display a high diversity of designs through deformations of flower and plant organs. However almost all motif plant species were obscure, except for the realistic pictures of Japanese camellia and deformed acanthus, narcissus, white lily and palm (date) which are common in Christian literature. The other assumed motif species were the rose, the chrysanthemum and the cherry. The general consensus regarding the reason floral deformations is referred to as a motif as Japanese camellia has been claimed without clear evidential support since 1991. The floral reliefs are, in particular, in churches whose architect was Mr. Yosuke Tetsukawa. These reliefs can be seen on flat space on hanging walls and ceilings which is a feature of the East Asiatic, Japanese dwelling house cultures. His basic imagination of flower-designation may have been created by 4 lobes of plant organs or European crosses, and the presence of diverse plant decorations may be derived from a fundamental design of rib-vault church building.

**Keywords :** Floral deformation, Japanese camellia, motif, ornamental decoration, roses

花のデフォルメ, ツバキ, モチーフ, 装飾デザイン, バラ

### はじめに

生活空間に装飾される植物や芸術に使われる植物は、人間の歴史や文化と深く関わり、地域文化の基層をなすこともある。一般に、植物の紋様やデザインには写実的なものから強弱のデフォルメによって抽象化された幾何学紋様までである(早坂, 2000a,b; レオンハート, 1979)。長崎県上五島を中心とした西九州には花模様の装飾のあるカトリック教会堂が知られ、ヤブツバキを花模様のモチーフとする記述が観光パンフレット(泉ら, 2004)、観光団体や自治体の広報ウェブ(五島市, 2013; 長崎県観光課, 2013)や写真集(白石, 2012)等に散見され、モチーフの背景に地域の自然資源の特徴や照葉樹林文化との関わりも示唆されている

(比留木, 2003)。しかし、その根拠や詳細は明瞭ではない。

西九州の北部はリアス式海岸の入りくんだ大小の湾と島々からなり、多数のカトリック教会は、小値賀島、中通島、奈留島、福江島など五島列島の島々と松浦半島、西彼杵半島、島原半島、馬渡島や平戸島、黒島、天草諸島にみられる。この地域の景観を彩る植物的自然は、シイ (*Castanopsis cuspidate* (Thunb.) Schottky) やタブノキ (*Machilus thunbergii* Sieb. et Zucc.) などが林冠をなす常緑広葉樹林いわゆる照葉樹林である(宮脇, 1982)。照葉樹林の中層にはヤブツバキ (*Camellia japonica* L.), タイミンタチバナ (*Myrsine seguinii* Lev.), ヒサカキ (*Eurya japonica* Thunb.) などがあり(山本, 2001)、攪乱された樹林や周縁部にはヤマザクラ (*Prunus jamasakura* Sieb.

2013年11月5日受付. 2014年1月10日受理.  
本稿の一部は、人間・植物関係学会2013年大会で発表した。

ex Koidz.) やノイバラ (*Rosa multiflora* Thunb.) なども生育している (山口, 1995)。自然林の代償植生にはツバキ林, ウバメガシ林やモウソウチク林などもあり (前川, 1952; 外山, 1980), 暖流の影響を受ける海岸部にはソテツ (*Cycas revoluta* Thunb.) も自生している。

西九州の海岸と大小の島々は浅い海で繋がって住民の生活文化も共通した特徴をもっている。例えば, 五島では, 生業はおもに漁業で, 一部に農作物が作られているが, 商業は海産物の流通によって資本集積された商家によって営まれ, 漁業あるいは農業だけで生業をなす集落は少ない (宮本, 1952; 新上五島町, 2011)。穀物の生産の少ない五島は, 海産物のほかサツマイモ (*Ipomoea batatas* (L.) Lam.) の切り干し「かんころ」と高級なツバキ油を産する「かたし」で周辺に知られている。媒染料や炭や材としても有用なヤブツバキは (石沢ら, 2002), 古くから住居周りに防風や緑陰樹として植栽され (歌野, 2013), 選択伐採によって意図的にも栽培されている。近年は島興しの一環でツバキを原料とする商品開発も進められている。また, 五島のヤブツバキは, 形態的多様性の高い事で知られ, ‘玉之浦’や‘大宝侘心’などの園芸品種を生んでいる (日本ツバキ協会, 2010)。

長崎県や五島市が世界遺産へ登録しようと目指しているカトリック教会群は (長崎県観光課, 2013; 五島市, 2013), 明治維新の6年後に禁教令が解けてから数十年に及ぶ歳月を費やして建築されている。厳しい禁教政策の中, 九州各地からの移住者は, 港から離れた高台や生活の利便の良くない土地に入植し, 主に農業を営んでいる (新上五島町, 2011)。この信徒達によって建築された教会堂が貴重な文化財となっている。そのうち鉄川与助が建築に携わった34を超える教会は (川上, 1992), 木造, 煉瓦積み, 石積み, コンクリート作りに関わらず花模様で装飾されている (草地, 1991)。

この地域の教会堂のおおよそは, 身廊 (主廊) に側廊を備えたバジリカ様式の3廊式で (田淵, 2009), ロマネスクあるいはゴシック風のリブヴォールト天井 (こうもり天井, 以下リブ天井と略記する) または日本建築にみられる平天井を持ち, 堂内はステンドグラスで採光されている (三沢・川上, 2007)。一般に, 教会堂には, 正面玄関の扉とその上に半円のティンパヌムがあり, その上にバラ窓があり, 側壁の入り口の扉の上には円形あるいは半円形アーチ状の窓がある (早坂, 2000a)。アーチを備えたステンドガラス窓のトレーサリーは, 上部に円窓を備えることもある。リブ天井の場合は, リブは先端で交差して円盤 (ボス) によって結合されている。身廊と側廊の間の列柱は, 上層の屋根を支えつつ, 柱の先端に柱頭を備えている (早坂, 2000a)。これらの窓や壁面や柱に描かれ彫ら

れた彫紋にみられる植物模様や花模様のモチーフに関して幾つかの主張がある。

福江市 (現五島市) の観光連盟が発行したパンフレットは, 五島のカトリック教会の花模様について, 次の3類型を述べている (泉ら, 2004)。①ツバキの特徴を忠実に描写したもの, ②ツバキの特徴を生かしながら宗教的にシンボル化したもの, ③ツバキの特徴をアブストラクト風に捉えて宗教的なシンボルに重点を置いたもの。①には, 福見教会のステンドグラスや浜串教会の玄関にあるマリア像の祠にみられるツバキの描画, ②には, 旧細石流教会や頭ヶ島教会の4花卉の白花と中ノ浦教会の十字状の赤花, ③には, 奈留教会のバラ窓と堂崎教会のステンドグラスの花十字模様が例示されている。この前年には, ヤブツバキとカトリック教徒との深い関わりと教会堂の花模様をヤブツバキの花と見立てた同様の記述があり (比留木, 2003), ③の先丸の十字は西欧の伝統が地域の椿の花に融合するという風土化の現象と解釈されている。しかし, ③はいうまでもなく, ②の事例とされる頭ヶ島教会の“白椿紋様”や中ノ浦教会の“赤椿紋様”についてもツバキからの抽象化を示す根拠は述べられていない。

一方, 発表年は不明であるが, 峰脇英樹氏の作品「ロザリオロード・シリーズ」は, 教会堂の花模様をキリスト教に普遍的にあらわれるバラ (茨) の派生と主張しているようで, 同様の内容が長崎巡礼センター認定のアルバム帳に載っている (大形, 2012)。ここでは, 頭ヶ島教会と田平教会の花模様に“野バラ”のキャプションがつけられ, 中ノ浦教会の花模様は30年前にはピンクであったとし, 十字状にあしらわれた葉はバラの葉であるとしている。その中では中ノ浦教会のフランス製ルルドのマリア像の白花や若松大浦教会のマリア像の足下の花は野バラまたはバラと示されている。ほかには, 教会堂の花模様にはキクやスズランという記述もある (草地, 1991; 鈴木, 2003)。

一般に, 建物の装飾は, 計画, 設計, 施工, 完成という建築工程の作業と関わってくるので, 設計段階から綿密に意匠され, 教会堂の建築では使用目的も踏まえて準備される (田淵, 2009) が, 花模様のモチーフについては, 中ノ浦教会で「菱形と花柄を装飾帯に組み合わせた文様で彩られている。天井面にも各格縁の真中に花卉を模した装飾が付されており」と触れられた程度で (鈴木, 2003), 教会群全体での紋様の位置, 方向, 色彩, サイズなど, 建物の構造と装飾との関係についての詳細は花模様をツバキやバラのモチーフ (抽象化) あるいは紋様の風土化とする主張 (比留木, 2003; 草地, 1991) においても触れられていない。

これらの問題を考証する目的で筆者らは西九州の教会堂における植物紋様の実態を知るため2011年3月から2013年6月の間に6回の現地調査を実施した。その結果, 上五島を中心とする西九州の教会にはツバ

キヤバラのモチーフだけでなく、西洋文化に卓越的にみられる多様な植物をモチーフとする紋様が日本文化の基層と関わって存在していることが明らかになった。さらに室内装飾は、木造のリブ天井から煉瓦造りを経てコンクリート造りの船底天井への変化に伴って天井の原初的構造と装飾を原型として変化したと推定された。

## 調査地および方法

調査対象地は、五島列島および九州本島の西部とそれに隣接した平戸島、黒島、馬渡島、天草島の島々である。長崎県では、五島市（堂崎、水ノ浦、奈留、江上教会）、新上五島町（頭ヶ島、青砂ヶ浦、冷水、旧鯛ノ浦、船隠、福見、浜串、高井旅、桐、跡次、若松大浦、中ノ浦、江袋、曾根、仲知、大水、米山、大曾、青方教会）、佐世保市（黒島、三浦教会）、平戸市（紐差、宝亀、平戸、山田、田平教会）、長崎市（神ノ浦、黒崎、出津、大野教会）、島原市（島原教会）、佐賀県では唐津市呼子町（馬渡島教会）、熊本県では天草市（崎津、大江教会）、福岡県では三井郡大刀洗町（今村教会）を訪問し、教会堂内外の様子を観察した。写真集等（三沢・川上、2007；鈴木、2003；八木谷、2002, 2004）およびウェブ上の画像を参考にするとともに、長崎県

では、長崎大司教区より撮影許可を得た複数の教会については写真を使って解析した。各教会では、外壁等の観察とともに、内部の壁面、天井、ステンドグラス、リブの交差する部分および列柱の柱頭にみられる植物紋様または幾何学紋様を記録した。紋様の記述は、三つの事典（早坂、2000a,b；モーア、2003；レオンハート、1979）に従い、教会堂の部分呼称は三沢・川上（2007）および早坂（2000a）に従った。訪問観察した39教会における実態の一部と文献から得られた廃堂を含む教会の事例を適宜示しつつ、議論の上で重要な13教会について詳細を示して、植物紋様の多様性を議論したい。なお、本論文では、デフォルメは「対象の変形」の意味、モチーフは「中心題材」の意味に限定して使用する。模様、紋様、文様については、花模様、幾何学模様または植物紋様と表記している。

## 結果

祭壇や机椅子など可動で移り変わりの大きい要素を除いて、教会堂の建築に伴って意匠されたと推定される幾何学模様や花模様、植物紋様は、調査した五島と西九州のカトリック教会のうち、木造でリブ天井をもつ5教会（江上、冷水、中ノ浦、江袋、馬渡島教会）、煉瓦造りまたは石積みでリブ天井をもつ14教会（堂

Table 1. Plant deformations in Catholic churches in western Kyushu, Japan.  
第1表. 西九州のカトリック教会にみられる植物紋様.

教会名	基本構造・竣工年	垂直面 ①バラ窓、②ティンパヌム、③ステンドグラス（内陣） <sup>*</sup> 、④トレーサリー（窓） <sup>*</sup> 、⑤壁面 <sup>†</sup>	平天井 <sup>‡</sup>			リブ天井の 交差リブ部	列柱・窓柱の柱頭	備考
			持ち上げ部	身廊	側廊			
馬渡島	木造・明治14年 （昭和4年移築）	①平い円板に4+8+16のロゼッタ、③緑の十字幾何学模様（尖）と青のバルメット、④単純な窓ガラス	×	×	×	○	平滑の輪、窓柱にアカンサスとスイセン（4花弁、丸にサクラ状の大小の5花弁を八重のロゼットに	玄関天井の交差リブ部；
江袋	木造・明治15年 （平成19年火災、平成22年復元）	③12芒と6芒のバラ状の円窓に水平平行模様、④8芒星を持つ十字幾何学模様（丸）	×	×	×	○	到形	
冷水	木造・明治40年	③十字幾何学模様（丸）、玄関上：十字幾何学模様（丸）、④十字幾何学模様（丸）	×	×	×	○	全縁のシュロ葉	
青砂ヶ浦	煉瓦・明治43年	①12弁、②重ねの十字幾何学模様（尖）と3葉、③十字幾何学模様（丸）、④十字幾何学模様（丸十尖）、上部円窓に5芒の放射花模様（凹）、⑤身廊：ユリ十字と剣十字の重ね	×	×	×	○	アカンサスまたはシュロ状葉	外柱にブドウ紋様
田平	煉瓦・大正6年	②14弁放射の半裁、③説話図、④説話図（ムギ、ブドウを含む）、⑤矩形部：5葉または2葉を携えた5花弁の白花（身廊側面は枝付き、玄関向きは枝無し）	×	×	×	○	アカンサス、スイセン（白色、4花弁）	
頭ヶ島	石造・大正6年	①正方形の弁に十字の幾何模様、②8弁の半裁の放射状幾何模様、入口：十字幾何学模様（丸）、④十字幾何学模様（丸）、⑤矩形部：鋸歯のある2単葉を備えた4花弁の白花、梁頭に黄色多数芯を備えた4花弁の白花	○	○	×	×	窓柱：アカンサス	梁頭の花弁は内に向かって湾曲し盛り上がる。複数の芯は切り込みで表現
江上	木造・大正7年	②花弁の間に鋸歯を持つ単葉、5花弁の花模様の半切、③木製のガラス窓、④黄色またはピンクの芯をもつピンクまたは黄色の5花弁	×	×	×	○	クローバー状の3葉、全縁のアカンサス	4葉の空気抜孔
旧細石流	木造・大正10年 （昭和46年廃堂）	①平板、②放射状8弁の半裁、③丸に十字幾何学模様（丸、赤と青）、④不明、⑤身廊側面：菱枠に長短の鋸歯葉が4花弁の白花を抱く <sup>‡</sup>	○	○	△	×	△	大石編『復活の島』などより、 <sup>‡</sup> 福江の五島観光歴史資料館では「十字型の木製レリーフ」と説明、破風に左右相称のツル状の植物紋様
福見	煉瓦・大正13年 （増築）	①放射状幾何模様、③ヤブツバキ模様（赤花と紫花）、④十字幾何学模様	△ （ナシ）	○	○	×	×	
中ノ浦	木造・大正14年	②8弁2重の放射の半裁、③説話図、④大きな十字⑤松川中陰葉の枠内に赤色の4花弁、長短の鋸歯葉が花弁を抱く	△ （ナシ）	○	○	○	平滑な輪のみ	香室の窓にバラ（つるばら）のモチーフの貼り絵あり
紐差	コンクリート・昭和4年	③説話図、⑤内壁：5扉崩れのクローバー、矩形部：鋸歯を持つ3葉で全体を占めるように配置	○	○	○	×	アカンサス	玄関天井：4花弁白花とバルメットで正方形
大江	コンクリート・昭和8年	②12弁放射状半裁、③説話図、④上部の丸窓に十字幾何学模様（丸）、⑤矩形部：鋸歯のある3葉を飾る	○	○	○	×	アカンサス	
浜串	コンクリート・昭和42年	②玄関扉：ブドウ、③なし、④側面壁：十字架状のスリット	×	×	×	×	×	入りロリア像詞のカスケードにヤブツバキの貼り絵

\*×：構造上ない、△：構造上あるが模様はない、○：紋様あり。

<sup>‡</sup>③と④の（ ）内の丸と尖は十字架弁の先端の形状。

<sup>†</sup>⑤の矩形部：梁と柱とアーチの間の3角状の空間を示す。

崎, 頭ヶ島, 青砂ヶ浦, 旧鯛ノ浦, 福見, 大曾, 黒島, 宝亀, 山田, 田平, 神ノ浦, 黒崎, 崎津, 今村教会), コンクリート造りでリブ天井をもつ3教会(平戸, 三浦, 水ノ浦教会), コンクリート造りで平天井または船底天井の5教会(奈留, 浜串, 大水, 紐差, 大江教会)で確認され, 多寡はあるものの教会堂の壁面や天井などの平面部とリブ天井のリブの交差部(ボス, 以下交差リブ部と示す)および柱頭にみられた。そのほかの12教会では明らかな植物装飾は無かった。植物装飾の見られた12教会と五島観光歴史資料館保存の資料および文献よりまとめた旧細石流教会の状況を見ると(第1表, 第2表), 紋様は, 垂直面では, バラ窓と玄関の半円部(ティンパヌム), ステンドグラス(内陣およびトレーサリー)とその上部の円窓, 身廊と側廊の間あるいは身廊と玄関部の間の壁面および柱と梁とリブ(アーチ)の間の湾曲した弦を持つ矩形の直角3角形の部分(板張りまたは壁面: 以下3角状矩形部と記述する)に存在していた。教会堂の基本構造の違いによって天井に交差リブのある場合は中ノ浦教会を除いて平面の天井や持ち上げ部は存在しなかった。中ノ浦教会では内陣部分がリブ天井で他は平天井(船底天井または折り上げ天井)であった。柱頭は列柱および窓柱の頂部にみられた。花模様の多様性や由来に関して議論されて来たおもな教会堂の現状だけで, この地域における植物紋様の存在様式の傾向は把握できた(第1表, 第2表)。

垂直面においては花十字の幾何学模様がほとんどの教会の内陣またはトレーサリーのステンドグラスやバ

ラ窓や円窓にみられた(第1表)。バラ窓では, 光を透過しない円板または透過するガラス張りで8芒, 12芒, 16芒の星状模様と5芒の花模様が多かった。十字状模様はほとんど丸枠にデザインされていたが頭ヶ島教会では正方形枠にデザインされていた。

ティンパヌムには5芒, 8芒, 12芒の放射模様の半裁が多かった。江上教会では, 玄関のティンパヌムに5弁花の半裁の花模様があり, 花卉の間には鋸歯をもつ単葉がデザインされていた(第1図①)。大曾教会(1916年竣工)では5花卉の白ユリがフェストーン(花綱)としてデザインされていた(第1図②)。

福見教会および浜串教会と中ノ浦教会には写実的な花模様がみられた。福見教会の内陣の上部のステンドグラスには葉を備えた明らかなツバキの花が描かれていた(第1図③)。浜串教会では聖堂への入口部のマリア像を納める祠のカスケード部に葉を備えたツバキの花模様が色あせていた。中ノ浦教会では内陣に接した香室の外に面した窓にやや抽象的なバラの絵柄がみられた(第1図④)。福見教会と浜串教会で装飾されていた花模様は中央芯が立って互いに癒合しており明らかにツバキまたはヤブツバキであった。

内陣と側廊の窓にあるステンドグラスには先の丸い十字状の花模様が多く(第1図⑤, ⑥), 一部では尖頭の十字模様と混在し, 馬渡島教会の内陣にはパルメット紋様があった(データ省略)。青砂ヶ浦教会の窓の上の円窓には5芒の花模様がデザインされており, 大曾教会では, 内陣やトレーサリーのステンドグラス上部の円窓は5芒の花模様になっていた(第1図

Table 2. Plant deformations on the ceiling portion of Catholic churches in Western Kyushu, Japan.  
第2表. 西九州のカトリック教会の天井部分にみられる植物紋様.

教会名	平天井			交差リブ部	
	持ち上げ部	天井(身廊)	天井(側廊)	身廊	側廊
馬渡島	-	-	-	丸に21弁の放射でキク状	丸に8弁の蕾花
江袋	-	-	-	大小のイチヨウシダ模様を八角の連の外に配置(クローバー十字に見える), アカンス十字とユリ十字の重ね, 大小の葉を4枚ずつ	丸に8葉(点で芯), 4弁+8弁の丸に6葉の蕾花, イチヨウ状の十字(マルタ騎士団章に類似)を4個の円と丸で囲う
冷水	-	-	-	6弁の馬蹄の円型に12弁のプロペラ状戦闘模様(捻れ)	6弁の鈍頭錨の中心に6片の戦闘模様(捻れ)
青砂ヶ浦	-	-	-	丸に8芒の星, ユリ十字, 8芒星	クローバー十字, 6弁の羽?
田平	-	-	-	白色アーティチョーク状アカンス, 2枚×8弁の16弁のロゼッタ	-
頭ヶ島	菱に大小のユリ十字の重ね	丸にロゼッタ(8葉の2重)	-	-	-
江上	-	-	-	8弁の3重のロゼッタ	8弁の3重のロゼッタ
旧細石流	菱枠に8片の菊状花(長短の白色の十字の重ね)	丸に緑の剣十字と白のトロース十字(2重)	不明	-	-
福見	身廊・側廊とも持ち上げ部はあるが装飾ナシ	丸に剣十字(バリザードン十字)とユリ十字(2重)	丸に獣足十字(三角旗状十字)とバリザードン十字(ギリシャ十字), 丸に3弁の3角とねじれ3花卉	-	-
中ノ浦	持ち上げ部はあるが, 装飾ナシ	丸にピンクの十字(グラープシャウヘル十字)と剣十字の重ね	丸にピンクの捻れ3片が5枚	祭壇部: 身廊天井と同じ紋様で金色の小型	-
紐差	菱に4枚の鋸歯葉(十字), 菱に白色の十字状花	ロゼッタ(八重の白)	4花卉白花とパルメットで正方形	-	-
大江	角切り菱枠に一枚十字と2枚十字を白と橙色に塗り分け, 菊葉に似る	2重の剣十字の間に緑のパルメットで6角をつくり, 先に橙色のパルメット4個を配置	2重の剣十字の間に緑のパルメットで6角を削り, 先に橙色のパルメット4個を配置	-	-
浜串	-	-	-	-	-

⑥)。江上教会では、窓ガラス（トレーサリー）に5  
 花卉の花が描かれており、その花びらは放射状で、花  
 弁の先端は明瞭に凹んでいた（第1図⑦）。花卉の色  
 がピンクと芯が黄色の組み合わせと花卉が黄色で芯が  
 ピンクの組み合わせの2種類がみられた。

抽象化された長短の花弁を十字状に配置した花模様  
 は旧細石流教会と中ノ浦教会の垂直面に確認された。  
 五島観光歴史資料館に保存されている旧細石流教会の  
 レリーフでは十字状の花弁の間に大小の葉がデザイン  
 され、葉の葉脈は羽状で、葉縁は波打つか鋸歯状であっ  
 た（第1図⑧）。花卉は白色で、花卉を抱く葉と水平  
 の細長い葉が菱状に配置されていた。中ノ浦教会の花  
 模様は旧細石流教会のレリーフと類似していたが、花  
 弁は赤色であり、鋸歯を持つ葉と合わせて松皮菱（中  
 陰松川菱）の枠内に納まっていた（第1図⑨）。紐差  
 教会では身廊の内壁の垂直面に5曜の下部が欠けたク  
 ローバーを思わせる緑の紋様があった（第2図②）。

田平教会と頭ヶ島教会の三角状矩形部には白い花卉  
 の花模様がみられ、田平教会では5花卉（第1図⑩）、  
 頭ヶ島教会では4花卉であった（第1図⑪）。いずれ  
 も花卉の先端は鈍円形で、複数の雄蕊（雄しべ群、芯）

は、円盤で示され、田平教会では打点によって頭ヶ島  
 教会では切り込みによって表現されていた。頭ヶ島教  
 会では身廊に向かって水平に突出した梁の先端の垂直  
 面にも花模様があり、この花卉は先端を巻き込んだ杯  
 状に彫られており（第1図⑫）、花の内部は白色、外  
 側はピンクに彩色され、外側の花卉と花卉の間には小  
 さな突起があった。

田平教会と頭ヶ島教会の花模様は、花卉の数を除い  
 て花の色、中央芯の形状など互いによく似ていたが、  
 田平教会では花卉の基部の相互の接触部がピンクに彩  
 色されていた。両教会の花模様の花卉に備えられた葉  
 は、鋸歯を持ち、中央脈の明瞭な羽状葉脈となっており、  
 頭ヶ島教会ではすべて枝はなく、田平教会では茶  
 色の枝のある場合は5花卉の花びらと5枚の葉をつな  
 ぐかたちで褐色の枝が描かれていた。枝のない場合は  
 2葉が備えられていた。

田平教会の5花卉の花模様では、左上または右上  
 の花卉が3角状矩形部の直角の隅に向って配置され、  
 頭ヶ島教会でも花卉の一枚が梁と柱の直交する隅に向  
 いており、4枚の花卉は斜め十字状に配置されていた。  
 頭ヶ島教会では、葉は、3角状矩形部の隅に向かって

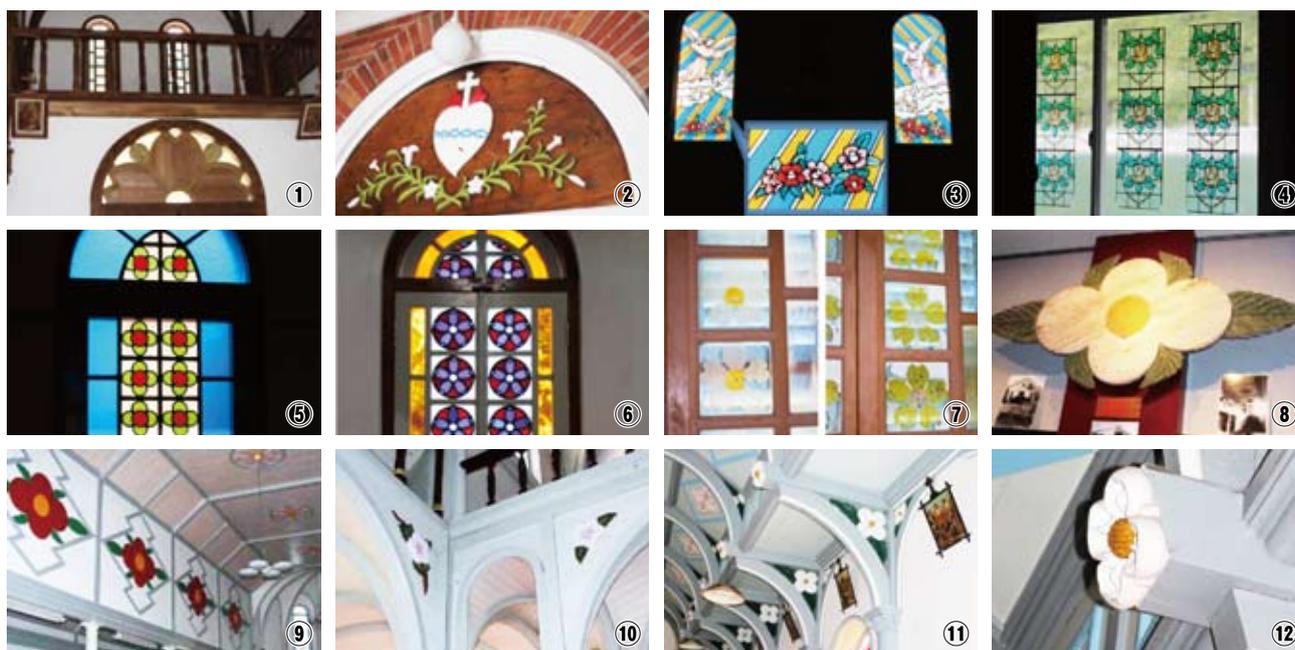


Fig. 1. Floral design in Catholic church in western Kyushu, Japan.

①Floral deformation in tympanum of Egami church: Presence of a simple leaf between 5 lobes of a half cut flower; ②A lily festoon on a tympanum of Oso church : A balloon indicates Japanese camellia; ③Floral figures on stained glass of Fukumi church; ④Floral design of a vine rose in Nakanoura church; ⑤Floral design on stained glass at Hiyamizu church; ⑥Floral design on stained glass at Tabira church; ⑦Floral design on window glass under tracery in Egami church: There are two flower types of pink petals and yellow filaments and of yellow petals and pink filaments; ⑧Floral relief from a retired Sazare church deposited in Goto History Museum in Fukue; ⑨Floral design on the Matsukawabishi frame on the inside wall of Nakanoura church: It has been said that the red flower was previously pink; ⑩Floral design arranged with wide marginal spaces on the triangular portion of inside walls in Tabira church; ⑪Floral design arranged without marginal spaces on the triangular portion of inside walls in Kashiragajima church; ⑫Floral design arranged on the head of lentil in Kashiragajima church.

第1図. 西九州の教会堂内にみられる花模様。

①ティンパナムに見られる花模様（江上教会）：半裁の5花卉の弁の間に鋸歯をもつ単葉がある、②ティンパナムに見られる白百合のフェストーン（大曾教会）、③ステンドグラスのヤブツバキ模様（福見教会）：ツバキを吹き出しで示す、④つるバラの花模様（中ノ浦教会）、⑤ステンドグラスの花模様（冷水教会）、⑥ステンドグラスの花模様（大曾教会）、⑦トレーサリーに見られる花模様（江上教会）：ピンクと黄色が花びらと芯で反転して使われている、⑧旧細石流教会の花模様レリーフ（福江の五島観光歴史資料館で撮影）、⑨松皮菱の枠内の花模様（中ノ浦教会）：赤花はかつてピンクであったとされる、⑩三角矩形部にゆったりと意匠されている花模様（田平教会）、⑪三角矩形部を葉で埋めた白花の装飾（頭ヶ島教会）、⑫梁頭にあしらわれた花模様（頭ヶ島教会）。

配置され、上段の3角状矩形部では花びらは圧縮され、2枚とも4枚とも取れる形状となって、葉は先細りとなる3角状矩形部の隅に向かって配置されていた(第1図⑪)。田平教会では、花と葉の組み合わせの周辺に板張り部の大きな余白がみられたのに対して、頭ヶ島教会では板張り部の余白は狭くなるか、板張りを欠き、花と葉は欄間風にデザインされていた。

3角状矩形部には紐差教会と大江教会でも植物紋様がみられた。紐差教会の3角状矩形部には頭ヶ島教会に類似する3枚の単葉が隅に向かって配置され、隅の形に沿って長さとおおきさを変えた緑色の葉の紋様(3裂、5裂、7裂の3種類:浅裂)がデザインされていた(第2図①)。大江教会では3角状矩形部にブドウの蔓風の紋様があった(データ省略)。

天井の紋様は、和天井もしくは船底天井とリブ天井によって大きく異なっていた(第2表)。船底天井の教会では、持ち上げ部に植物紋様または花模様がデザインされており、旧細石流教会では菱枠の中に菊に見える紋様があり(久賀島近代キリスト教墓碑調査団, 2007)、頭ヶ島教会では菱枠内にユリ十字を重ねた紋

様がみられた(第1図⑪)。紐差教会では4葉を十字状菱型に配した植物紋様と白い十字を菱枠にデザインした紋様が(第2図②)、大江教会では隅切り角の枠に十字が菊菱状に意匠されていた(第2図③)。

船底天井の水平面では装飾は身廊および側廊ともにみられ、丸に剣十字など(第2図④)、丸枠に多様な十字模様を組み込んだ装飾がみられ、時に片が3数のものや、放射状のロゼット模様があった。中ノ浦教会では側廊の天井に捻れた5片からなる花模様があり(第2図⑤)、福見教会には捻れた3片からなる花模様があった。紐差教会と大江教会の天井平面には、旧細石流教会または中ノ浦教会の花模様より更に抽象化の進んだ幾何学模様があり、紐差教会では、身廊の天井に6角の枠に白いロゼッタがデザインされ、側廊と玄関の天井には黄の丸を中心に配した4弁の白の花模様があり、その外側の四方には緑のパルメットがデザインされていた。大江教会では十字の重ねや組み合わせに緑と黄色のパルメットの紋様が4数を基本とするアラベスク風に組み合わせられていた(第2図③)。

交差リブ部の紋様は、平面天井の紋様に対応して存



Fig. 2. Floral and plant designs in Catholic church in western Kyushu, Japan.

①Floral design arranged on the triangular space of inside walls and ceilings in Himosashi church: Leaves are arranged along a narrow corner. Palmettes are designed to appear as four lobed white flowers; ②Plant design motif as the eight-partite vault ceiling in Himosashi church: Distinct rosette, white crossed flowers, green leaves with serrated margin and clover like green leaves; ③Plant design motif as the quadripartite vault ceiling in Oh-e church: Diverse crosses and palmette are combined to display an arabesque pattern; ④Floral crosses on the ceiling of the central hall in Fukumi church; ⑤Floral design on the ceiling of corridors in Nakanoura church; ⑥Horse's hoof and a combat sign on the bosses in Hiyamizu church; ⑦Floral decoration, rosette or chrysanthemum pattern, on the bosses in Dozaki church; ⑧Floral decoration on the bosses in Ebukuro church: Plant species of the decoration is unknown; ⑨Floral decoration, rosette, on the bosses in Egami church; ⑩Acanthus and narcissus arranged in a pillar terminal in Tabira church; ⑪Palm leaves arranged in a pillar terminal in Hiyamizu church; ⑫Narcissus, vine and animal faces arranged in a pillar terminal in Madarajima church.

第2図. 西九州の教会堂内にみられる花と植物模様.

①天井と3角状矩形部の植物紋様(紐差教会):葉は隅の形に伸ばされ、天井の4花弁の白花にパルメットが添えられている。②8分割リブヴォールトを模した天井の植物紋様(紐差教会):ロゼッタ、十字の白花、鋸歯のある緑葉、クローバー状の紋様もみられる。③4分割リブヴォールトを模した天井の植物紋様(大江教会):形状の異なる十字紋様とパルメットがアラベスク風に組合わされている。④身廊天井の平面の花十字模様(福見教会)。⑤側廊天井の平面の花模様(中ノ浦教会)。⑥交差リブ部の馬蹄と戦闘模様(冷水教会)。⑦交差リブ部の植物装飾(堂崎教会):ロゼッタかキク。⑧交差リブ部の植物装飾:植物種不明(江袋教会)。⑨交差リブ部の植物装飾:ロゼッタ(江上教会)。⑩柱頭に装飾されたアカンサスとスイセン(田平教会)。⑪柱頭に装飾されたシュロ(冷水教会)。⑫柱頭に装飾されたスイセンとブドウと動物面(馬渡島教会)。

在しており（第2表）、円盤に6弁の放射状、十字紋様を重ねた8弁の放射状、12弁あるいは21弁のロゼッタや菊丸紋がデザインされ（第2図⑥～⑨）、冷水教会では中央に弁の捻れをもつ2種類の戦闘紋様があった（第2図⑥）。江袋教会にはクローバー十字やイチョウシダ紋様などのレリーフもあったが（データ省略）、側面からみた花のつぼみ状のレリーフあるいは先端が尖らず丸い蕾状になるパルメットとも読める紋様があった（第2図⑧）。

列柱または壁に埋め込まれた窓柱の上部の柱頭には、ほとんどの場合、アカンサスまたはシュロの彫紋がみられ（第1表）、アカンサスの葉の先端はロール状に巻いていた（第2図⑩）。馬渡島教会および田平教会ではアカンサスの葉の間に4花卉の水仙様の花の彫紋があり、彩色されている場合もあった（第2図⑪、⑫）。田平教会では隣あった水仙が会合した花は5花卉状となっていた（第2図⑩）。馬渡島教会の柱頭には犬か猿と思われる獣面の彫刻がみられた（第2図⑫）。また、いくつかの教会では外壁の柱の柱頭にブドウの果房の彫紋やブドウの葉のフェストーンがみられた（データ省略）。

## 考 察

### モチーフ

第1表、第2表および第1図、第2図に明らかなように、上五島を中心としたカトリック教会の植物紋様は、花模様とよめる幾何学模様と写実的なヤブツバキを除いて、デフォルメされた5花卉および4花卉のスイセンや白ユリの花、鋸歯をもつ浅裂の羽状脈の単葉、アカンサスやシュロの葉、ブドウの葉と果実のいずれかであった。花模様のモチーフの候補には、キク（菊丸、菊菱）、バラ（ロゼット）、ユリ（パルメット）があったが、旧細石流教会、中ノ浦教会、頭ヶ島教会にみられる垂直面の十字状の4花卉の花模様（第1図⑧、⑨、⑪）と田平教会の5花卉の花模様（第1図⑩）は、雄しべが複数で花の中央に集まり、葉に鋸歯があり、葉脈が羽状であり、バラ科の植物のデフォルメと思われたが種の特定は難しかった。また、幾何学模様のほとんどは多様な十字紋様を組み合わせた花模様と多数の片を放射状に配置した模様で、これらのモチーフの植物はよく判らなかった。

五島のカトリック教会堂における植物紋様は、古くは旧細石流教会の天井について「各梁間に、4葉、8葉の植物の彫刻を入れる」と述べられる程度で（長崎県教育委員会、1976）、モチーフは示されていないが、1991年にツバキやキクやバラという具体的な植物が示されている。

教会堂建築にあたった鉄川与助氏の建築思想とその背景を述べた西日本新聞の1991年4月25日から同年

6月25日までの連載記事には（草地、1991）、花模様は、6月6日の36回目に「造られた会堂の随所に目立つ日本式の手法や装飾デザインがあるのも、不思議なこと。とりわけ与助の作には、ツバキなど、西九州の風土を感じさせる花模様も少なくない。」と記述され、旧細石流教会堂の花十字状のレリーフの写真（個人提供）が「ツバキの装飾模様」というキャプションで引用されている。6月11日の連載40回目には「頭ヶ島はまた、天井の形が・・・（略）。板張り天井に、与作流の花柄模様の装飾がふんだんに取り入れられていることだ。花柄は椿（つばき）とも、バラとも取れる柄。色調は・・・」と述べられ、6月15日の連載44回目には、船底天井では「・・・平天井の部分には、例外なく幾何学模様や花模様がつく。その花は、ツバキとも、菊とも見え、バラの花の豪華さも見てとれる」と述べられ、6月16日の連載46回目では、「花模様も、会堂ごとに微妙な違いがあり、大江のは、デザイン化されたスズランが中心。」と記述され、モチーフとしてキクとスズランが追加されている。

その後、花模様のモチーフについては、旧細石流教会に関して「正面入り口の・・・切妻破風飾り、・・・格天井や小壁に彩色した五島椿の花模様が・・・」と記述され（福江市、1994）、廃堂になった細石流教会の平成元年（1989年）の調査の記録では「彩色も鮮やかな椿、菊花をかたどった文様が身廊側面と折上天井の部分に残っていた」とされ（鈴木、2003）、ツバキとキクが主張される。また、頭ヶ島の堂内装飾の白花について「約10年前、・・・一見してわかる白椿の紋様である。」とツバキがモチーフとされ（比留木、2003）、さらに、現在、五島観光歴史資料館保存の旧細石流教会堂のレリーフは「椿十字型の木製レリーフ」と表記され、若松大浦教会の案内板には、「聖母の足元には五島列島を代表とする椿があしらわれる」と、花模様のモチーフをツバキとする記述が多い。しかし、ツバキのモチーフはスズランと同様に根拠を欠いている（後述）。

### デフォルメの植物学

西九州の教会堂のステンドグラスなどには、聖書やキリスト教に関連する説話図が良くみられ、そこには写実的なブドウ（*Vitis vinifera* L.）、クローバー（*Trifolium repens* L. または *T. pretense* L.）やコムギ（*Triticum aestivum* L.；オオムギ（*Hordeum vulgare* L.）やマカロニコムギ（*T. durum* Desf.）のこともある）があるが、デフォルメ対象となっている植物を順に検証したい。

椿：ツバキ（*Camellia japonica*）の葉は、光沢のある卵形でごく浅い鋸歯があり、丸い腺が黒く見える（石沢ら、2002）。葉の中央脈は表裏とも見えるが、表面では肋脈は厚い葉肉とクチクラのため不明瞭とな

る。枝は、茶色になることもあるが通常は緑色で古い枝は白色を帯びる。瓦状に重なった萼片に包まれて5花弁の1花をつけ、鈍頭の花弁は基部で癒合して筒状になり、複数の雄しべ（花芯）の基部も花弁と同様に癒合して筒状になる。肥後椿などのツバキ品種やサザンカ（*C. sasanqua* Thunb.）の花では花芯が平開し放射状に配置することもある。近縁のサザンカやユチャ（*C. oleifera* Abel.）では花弁も雄しべも癒合せず、平開する。一般に、観賞用品種の場合はツバキと総称され、野生種はヤブツバキと呼ばれるが、ツバキ愛好家の間では園芸品種のうち野生種に近い品種をヤブツバキと呼称する（日本ツバキ協会, 2010）。五島ツバキ事典（泉ら, 2004）や比留木（2003）のいうヤブツバキはこの品種群に当てた表現である。“五島椿”という表現（福江市, 1994）は「大島椿」と同様に椿油の商品名に使われることはあっても植物学的あるいは園芸学的な群を示さない。比留木（2003）は花模様の先端の丸みがツバキを示すとしているが、ふつう、葉縁が全円で中央芯が癒合することによってツバキと判断するので、福見教会と浜串教会の写実的描画以外のレリーフ（第1図⑧～⑫, 第2図①）は、中央脈が明瞭な羽状浅裂の葉をもっており、ツバキとは考定できない。

薔薇：バラ（*Rosa hybrida* Hort. またはバラ属 *Rosa* の総称）の葉は、通常、複葉で、いくつかの小葉をもつ。羽状葉脈の小葉には鋸歯がある（山中ら, 2002）。枝の先に5枚の萼片をもつ1花をつけ、花弁は先端がやや凹み、野生種では花は一重咲きで、5枚の花弁は通常ピンクがかかった白となる。八重バラでは、雄しべが花弁化している。種によってはがく片の先端が長く伸び花弁の間にみえる。枝に鋭利な棘がある。西九州にはノイバラのほか海岸部にテリハノイバラ（*R. wichuraiana* Crep.）が優占してみられる。ノイバラやテリハノイバラは園芸品種のツルバラの親とされ、四季咲きバラの親ともされる（上田, 2013；山中ら, 2002）。バラの近代品種は多数の野生種を親とした雑種で、元の親の推定すら困難な場合が多い。花弁の先端は鈍頭または浅く凹む。高芯剣弁の品種では、花びらの先端が巻き込んだり、先端の突起が顕著なものもある。若松大浦教会のマリア像の足元に描かれた花模様には、剣弁咲きに巻き込んだ花弁の先端と鋸歯をもつ葉片に近代バラの特徴が表れており、これは看板で説明されているツバキではない。紋章学のバラでは、剣弁咲きの特徴や萼片がデザインされるが（レオンハード, 1979）、頭ヶ島教会の梁頭の花弁の間にある付属物を萼片とみなせば（第1図⑫）、この花模様はバラと考定できる。中ノ浦教会の香室の窓の絵は、デフォルメされているが、花弁は八重、葉は3出葉にデザインされており、つるバラと考定できる（第1図④）。交差リブ部や天井に描かれたロゼット紋（第2図②, ⑨）はバラをモチーフとしたデフォルメである。

桜：サクラ（サクラ属 *Prunus* 植物の総称またはソメイヨシノ（*Prunus yedoensis* Matsum.）を指す）の葉は単葉で葉脈は羽状で、葉縁は鋸歯状になる（小林ら, 2002）。バラと同様に子房下位で、1花は5枚の萼片の上に5枚の花弁をつけ、花弁の先端は明らかに凹む。花弁の基部と基部の間に三角形が出来るため花を上から見ると星状のくぼみが見える。雄しべは多数で平開し中央に集まる。枝は、若い時に緑の場合もあるが、多くは茶色で光沢がある。五島を含む西九州ではヤマザクラが野生している（外山, 1980；山口, 1995）。田平教会の5花弁の白花は、花弁の基部の重なりと花弁の位置が実在するヤマザクラの特徴とはずれているが、星状の窪みと散在する芯をもっており（第1図⑩）、備えられた枝葉が同種であるとすれば、ヤマザクラともみなせる。江上教会のティンパムとトレーサリーの花弁（第1図①, ⑦）、馬渡島教会の玄関上の交差リブの5花弁（第2表）および大曾教会などの教会にみられる幾何学模様には内に向いた鋭角の明らかなくぼみがあり（第1図⑥）、これらは同様にサクラの類と考定できる。

菊：キク（イエギク：*Chrysanthemum morifolium* Ramat.）は、チョウセンノギク（*Ch. zawadskii* Herbich）とシマカンギク（*Ch. indicum* L.）との雑種からできた東洋起源の観賞植物の代表の一つで、観賞用だけでなく薬用にも使われ、皇室の紋章や菊菱などの家紋にもなるほど古い歴史をもっている（小山ら, 2002）。一般に菊花と呼ぶ頭花は、花序にあたり、筒状花と舌状花からなる多数の小花をつけ、舌状花が菊模様の花弁にあたる。シマカンギクは西九州の海岸に普通にあり、チョウセンノギクは平戸南部に分布している（外山, 1980）。嘉永年間の五島家の家紋である丸に花菱の菱は菊紋ともとられるが（丹羽, 1976）、3弁の葉が十文字になっており、基部より放射状に花弁の出るキク菱（第2図⑦）および旧細石流教会の持ち上げ部とは異なる。日本の紋様には捻子菊があり、中ノ浦教会の側廊天井にみられる幾何学模様のねじれ紋様（第2図⑤）はキクのモチーフと考定できる。

水仙と百合と鈴蘭：スイセン（*Narcissus tazetta* L.）は古くに地中海地域から東アジアに伝播してきた植物で西南日本では野生化品もあるほどふつうにみられる（堀中・荒俣, 2002）。一重品種では花被片は6枚で、葉は線状で根生する。列柱の柱頭にみられる4花弁の花のレリーフは明らかにスイセンである（第2図⑩）。今村教会の列柱の花は、8花弁であるが、スイセンであろう（データ省略）。大曾教会のティンパムの5花弁のユリは、明らかに白百合（マドンナリリー（*Lilium candidum* L.）とされる）をモチーフとしたデフォルメである（第1図②）。大江教会でモチーフと解釈されたスズラン（*Convallaria majalis* L.）は（草地, 1991）、冷温帯ユーラシアに広く分布し、聖母

マリアと関わって降臨復活祭に使用される植物である(矢原ら, 2002)。しかし, 大江教会の装飾の基本単位はパルメット紋様であり(第2図③), 西洋でスズランとされる紋様ではない(レオンハート, 1979)。パルメットはユリの紋様の一つである(大形, 2012)。

薔と棕櫚: その葉がコリント式の柱の柱頭の装飾に使われるアカンサス(*Acanthus*)は, ハアザミ(*A. mollis* L.)もトゲハアザミ(*A. spinosa* L.)も地中海地域原産である(柳ら, 2002)。西九州のカトリックの儀礼にソテツが代用されているシュロは, 本来, 地中海南部のアフリカ原産のナツメヤシ(*Phoenix dactylifera* L.)である。本調査でみられたレリーフではアカンサスもシュロも葉の形状や切れ込みは多様で, 強弱のデフォルメがみられる(第2図⑩, ⑪)。これらもキリスト教に強く関わってきた地中海地域原産の植物である。

銀杏羊歯: イチヨウシダ(*Asplenium ruta-muraria* L.)はユーラシア冷温帯の石灰岩地帯などに生育する。広く観賞植物として使われる。日本では絶滅危惧種。江袋教会の交差リブ部にみられる紋様はイチヨウシダのデフォルメである(レオンハート, 1979)。

十字状の花: 花卉や苞が十字状になる植物にはアブラナ科やキンポウゲ科植物などがあり, 十字状に苞を配置するヤマボウシ(*Cornus kousa* Bueg. ex Hance)やバラ科で4花卉をつけるシロヤマブキ(*Rhodotypos scandens* (Thunb.) Makino)など, 旧細石流教会の木製レリーフ(第1図⑧)のモチーフとみなせる植物は限りなく多数存在する。

### 東西の紋様文化

生物をモチーフとした紋様は, 西洋では, 植物紋として, アカンサス, ロータス, ロゼット(バラ), 棕櫚, パルメット(ユリ: マドンナリリー), 月桂樹, 石榴, 百合などがあり, 動物紋として, 獅子, 羊, 山羊, 鹿, 馬, 牛, 兎, 犬があるのに対して(早坂, 2000a; レオンハート, 1979), 日本や中国の東洋では, 植物紋として, 松, 竹, 梅, 桜, 菊, 藤, 柳, 椿, 蕨, 桐, 鉄線, 百合, 牡丹, 蓮, 澤瀉, 桃, 瓜, 枇杷などがあり(早坂, 2000b), 動物紋としては, 鶴, 亀, 鳳凰, 鳶, 千鳥, 鹿, 獅子, 龍, 兎, 猿, 蝶などがあり, その多くは家紋などにもなっている(丹羽, 1976)。西九州のカトリック教会には聖書にみられるムギヤブドウの写実的な絵画とともに(武藤, 2006), ユリ, バラ, ナツメヤシ(シュロ), アカンサスなどの地中海地域原産の花や緑葉を愛でる植物をモチーフとした紋様が多く(第1表, 第2表), 東アジアや照葉樹林帯の植物をモチーフとした紋様は家紋にもなっているキクとヤマザクラである(第1図⑩, 第2図⑦)。ユリやバラは西洋で抽象的な紋様となっているのに対して日本や東洋では写実的に扱われ, 東アジアの植物では抽象

の程度は低く, ツバキは紋様として抽象化するまでには至っていない(早坂, 2000a,b)。照葉樹林の表徴種であるヤブツバキがキリスト教で特に取り上げられ抽象化しているのであれば(比留木, 2003), 地域の自然要素が外来の宗教と習合して固有の文化複合が成立したことになるが, 家紋としてのツバキ紋でも抽象化は進んでいない。照葉樹林文化は, 東アジアからネパールに広がる樹林帯に沿って分布する植物と樹林帯周辺の生物資源を活用する類似した生活文化要素の複合概念で(中尾, 1966; 上山ら, 1996), 日本では北方にブナ林文化を, 南方に黒潮文化を携え, 地中海地方の硬葉樹林文化に相對するが(中尾, 1978; 市川ら, 1984), 西九州の教会堂の装飾にはその両者に関わる植物紋様がある。

### ツバキの花模様

日本原産の照葉樹のツバキは, 古くからキリスト教との関わりを示し, 15~16世紀の東洋の美術にあらわれる(塚本, 1975)。桃山時代の南蛮磔蒔絵にみえる癒合した花糸と放射状に散在する花糸を持つ花は, 葉の形状もツバキである。慶長年間(1596~1614)の作と推定されている「マリアの十五玄義」にはマリアの手に一重の白ツバキが描かれているが, これは1937年に高槻市の農家から見つかっており, 大正年間, 田平教会や頭ヶ島教会でのデザインに影響したとは考えがたい。欧州へは園芸的なツバキは18世紀頃に一般的に広がるが, このころに欧州に伝わったツバキは winter rose と呼ばれた八重品種であり, 一重の白花や赤花の紋様とは緊がらない。これに対してバラは, ギリシャ時代のルネッサンス期になってから聖画にあらわれ, マリアのシンボルに変化する(塚本, 1975)。生月(平戸市)のお掛け絵には, 八重のツバキが描かれ(平戸市生月町博物館, 2013), 外海(長崎市)のバスチアン様のツバキ説話のようにツバキとキリシタンとの関係は西九州には歴然と存在し, ツバキの花は記念碑等によく使われている(長崎県, 2006)。しかし, 本調査では教会堂の抽象化された花模様をツバキに結びつける事実は得られなかった。

前述のように, 花模様に対して1991年には“椿”, 1994年には“五島椿”の言葉があらわれ, ツバキやキクやバラという具体的な植物種が認識されるようになるが, 草地(1991)や峰脇氏の作品(大形, 2012)にみられる花模様に対するツバキやバラやキクあるいはスズランという認識は, 観察者の感性に基づいてると推定される。近年の出版物やウェブや看板の記載は草地(1991)や泉ら(2004)や五島観光歴史資料館の「椿十字型の木製レリーフ」の表記を受けているようである(白石, 2012; 五島市, 2012)。鈴木(2003)は1993年に廃堂になった細石流教会で“白椿”のレリーフをみて, その後, 1999年に歴史資料館の書庫

で移動されたレリーフをみているから、歴史資料館での“椿の木製レリーフ”という説明も1991年より遅く、ツバキ説の提示は1991年の西日本新聞の記事が最も古いことになる。花模様のモチーフをツバキとする認識は、少なくとも1991年以降に表れ、根拠を欠いたまま周辺に広がったとみられる。

## 意匠

一般に建築物における装飾は、クライアントと設計者の意向によって決まるが、社会情勢や流行などの文化的変動の影響も受ける。西九州のカトリック教会における植物装飾特に花や葉の数と全体構図には緩やかな時代変化もみられる（第1表、第2表）。全体を通して十字を基調とした4数またはその倍数の8数の紋様が多いが、初期の建築では、5および6数の花模様や幾何学的紋様が混っている。大正末期の建築では菱状の4花卉のレリーフを備えた旧細石流教会と中ノ浦教会で丸枠に剣十字や菱枠に長短の十字模様の重ねをキクの形に納めたレリーフもあり、これらは4数の組み合わせでデザインされている（久賀島近代キリスト教墓碑調査団、2007）。昭和期の建設のコンクリートづくりの紐差教会および大江教会では、花模様または葉模様は、正方形あるいは菱形のデザインで付随するパルメットとともに4数性で十字の組み合わせとなっている。3葉や4葉のフォイル模様も、4数や5数の模様と混在していることもあるが、後期には4数に収斂する傾向にある。

教会建築は、木造あるいは煉瓦積みのリブヴォールト天井からコンクリート造りの船底天井あるいは折りあげ天井に変化するが（川上ら、1990；川上、2007；第1表）、壁や天井の装飾は、梁や柱や檜木やリブの配置に伴ってできる正方形、長方形あるいは3角状矩形の部位にみられる。正方形や長方形の場合は升もしくは菱の枠に花模様や葉模様がデザインされ、3角状矩形部へは花模様は、板張り部分か欄間風に配置され、田平教会の5花卉の白花と頭ヶ島教会の4花卉の白花がこれにあたる。田平教会と頭ヶ島教会で矩形部の3隅に向けてデザインされた葉はそれぞれの隅の長さに合わせて長短が決まっており、紐差教会と大江教会の抽象化の進んだ紋様はこの発展形にあたる。この原型は、旧細石流教会や旧米山教会の破風に左右相称に配置された植物紋様にみられる（鈴木、2003；新上五島町、2011）。鉄川与助の作とはされていないが、浅子教会でも（三沢・川上、2007）、3角状矩形部に丸枠に4弁の白い花模様が欄間風にデザインされている。

リブヴォールト天井から折りあげ天井にかかわると、天井の紋様は大きさや色を変え、鮮やかになる。持ち上げ部には、花模様は装飾されないか、頭ヶ島教会や細石流教会でみられるように菱枠にデザインされる。持ち上げ部の紋様はコンクリート造りの天井でも菱の

形状が保持されている。コンクリート造りの紐差教会と大江教会の船底天井では、中央の紋様に対して周囲から直線が補われており（第2図②、③）、これは8分割または4分割のリブヴォールトに対応したデザインと読める。

西洋や華北などの建築様式では日干しを含む煉瓦積みで屋根が支えられるが、照葉樹林帯では、屋根を柱で支える構造のハンギングウォールで高床の家屋建築が一般的である（中尾、1979）。頭ヶ島教会は特異な屋根支えのシステムをとっているが、木造か煉瓦積みに関わらず西九州のカトリック教会は身廊を中心として屋根の部分は列柱（木の柱）に支えられ、内壁や天井は板を架けて造られている。多彩な花模様は、屋根を支える機能を持たない窓や架け壁や天井の平面にみられる。構造物を支える機能を持つ交差リブ部や柱頭の装飾は小振りであるのに対して垂直面や平天井の平面部での装飾は大きくなっている。石柱やブロックなどの建築素材への直接の彫刻は建物の脆弱さの原因になるため（オリバー、2003）、リブ天井の教会では西洋の様式を保持しているのであろう。垂直面や天井の架け壁または板張りという照葉樹林文化の基層にあたる平面構造には東洋の花文化要素（キクやサクラ）とキリスト教に関わるユリやバラなどの西洋の要素が艶やかな植物紋様として配置されているとみられる。

西九州の教会の堂内や花壇は多様で多彩な花模様と花（切り花や花苗）で装飾されているのが一般的であり、この調査の間のインタビューでも祈りの場を美化する花当番や婦人会の人たちからはツバキだけでなく特別の花の種類に対する嗜好は聞き取れなかった。特別な花や植物と儀礼との強い結び付きの存在は、差別へのしるしにもなるとの指摘もあった。生活の糧を削って造った祈りの空間に提案された多彩な花模様は、カトリック信者というクライアントと設計者の協働による深い信仰への心の映しと読める。上五島を中心とした西九州のカトリック教会堂にはツバキだけとの単純な人間植物関係だけでなく、多様な花や植物との関係が潜んでいると捉えるべきである。

## 摘要

西九州のカトリック教会に装飾された花模様と植物紋様およびそのモチーフ認識の実態を知るため、39教会において花模様および装飾を調査した。垂直面の壁、窓、天井などの他、交差リブの結合部の円盤および列柱の柱頭にデザインされた紋様の多くは抽象化された描画もしくは彫紋で、モチーフとなった植物種は、少数ではなかった。写実的な描画にはヤブツバキ型の花を持つツバキがあったが、これまで白椿または赤椿のモチーフであるとされた花模様や幾何学模様は椿のデフォルメとは判断されなかった。花模様や装飾のモ

チーフには、アカンサス、スイセン、ユリ、シュロがあったほか、バラ、キク、サクラと推定される紋様も認められた。ツバキを花模様のモチーフとする見解は、1991年以降に明瞭な根拠を欠いたまま広がっている。鉄川与助の建築した教会の多くに見られる花模様と植物紋様は、リブヴォールト天井における装飾を原型として照葉樹林文化を基層とする日本建築の架け壁や吊り天井の平面にデザインされたと推定される。

## 謝 辞

本研究の現地調査では、長崎巡礼センターの方々、照葉樹林文化研究会会員および東京農業大学の方々にお世話になった。また、教会資産使用を快諾いただいた長崎大司教区、文献資料の収集およびホームページ等に関するインタビューに回答頂いた長崎市、五島市および各観光協会の方々に篤くお礼申し上げます。なお、本研究はサントリー文化財団の研究助成および東京農業大学大学院重点化経費による支援を受けています。

## 引用文献

- 福江市. 1994. キリスト教廃堂. pp.658-661. 福江市史 (上). 福江市. 福江.
- 五島市. 2013.3.27(調べた日). 五島を世界遺産の島に. <http://www.city.goto.nagasaki.jp/pc/sekaiisan/about/index.html>
- 早坂優子(編). 2000a. ヨーロッパの文様事典. 視覚デザイン研究所. 東京.
- 早坂優子(編). 2000b. 日本・中国の文様事典. 視覚デザイン研究所. 東京.
- 堀中 昭・荒俣 宏. 2002. スイセン属. pp.706-707. 堀田満ら(編)世界有用植物事典. 平凡社. 東京.
- 平戸市生月町博物館. 2013.10.28(調べた日) お掛け絵の種類 <http://www.ikitsuki.com/yakata/kiricult/index11.htm>
- 比留木忠一. 2003. 五島のキリシタン文化におけるヤブツバキの役割. 日本ツバキ協会誌 42: 62-75.
- 久賀島近代キリスト教墓碑調査団(編). 2007. 五島・久賀島キリスト教墓碑調査報告 復活の島. 長崎文献社. 長崎.
- 市川健夫・山本正三・斉藤 功. 1984. 日本のブナ帯文化. 朝倉書店. 東京.
- 石沢 進・箱田直紀・堀田 満・緒方 健・岩浅 潔・松下 智・梅原 郁・片山耕三・飯島吉晴・桐野秋豊. 2002. ツバキ属. pp.197-205. 堀田 満ら(編). 世界有用植物事典. 平凡社. 東京.
- 泉 松一・松本作雄・古賀忠臣・島 悟・今村安規子. 2004\*. 五島のカトリック教会とヤブツバキ.

- pp.20-21. 五島つばき事典. 五島観光連盟. 福江.  
★出版年不詳: 本文 32 ページ記事から推定.
- 川上秀人. 1992. 鉄川与助と外国人宣教師との関係について. デザイン学研究 9:29-36.
- 川上秀人. 2007. 長崎の教会建築史 pp.154-207. 三沢博昭写真集 大いなる遺産 長崎の教会改訂版. 智書房. 東京.
- 川上秀人・上田充義・前川道郎. 1990. 長崎県を中心とした教会堂建築の時代区分について. 日本建築学会計画系論文報告集 410:135-142.
- 小林義雄・中村恒雄・志村 勲・堀田 満・新田あや・飯島吉晴・斉藤正二・荒俣 宏・沢田瑞穂・小南一郎・楨佐知子. 2002. サクラ属. pp.845-867. 堀田 満ら(編). 世界有用植物事典. 平凡社. 東京.
- 小山博滋・岡田正順・柳 宋民・星川清親・高橋文次郎・浅山英一・堀田 満・新田あや・梅原 郁・山辺知行・斉藤正二. 2002. キク属. pp.258-265. 堀田 満ら(編). 世界有用植物事典. 平凡社. 東京.
- 草地 勉. 1991. より高く美しく: 鉄川与助とその時代 <1> ~ <51> 西日本新聞(1991年4月25日~同年6月25日連載)
- レオンハート, ヴァルター(須本由喜子訳). 1979. 西洋紋章大図鑑. 美術出版社. 東京.
- 前川文夫. 1952. 西海国立公園候補地の植物. pp.63-75. 五島列島~九十九島~平戸島学術調査書(西海国立公園候補地)総論(学術資料第3号). 長崎県.
- 三沢博昭・川上秀人. 2007. 三沢博昭写真集 大いなる遺産 長崎の教会改訂版. 智書房. 東京.
- 宮本常一. 1952. 五島列島の産業と社会の歴史的発展. pp.87-132. 五島列島~九十九島~平戸島学術調査書(西海国立公園候補地)総論(学術資料第3号). 長崎県.
- 宮脇 昭(編). 1982. 日本植生誌2 九州. 至文堂. 東京.
- モーア, ゲルト・ハインツ(野村太郎・小林頼子・内田俊一・佐藤茂樹・宮川尚理訳). 2003. 新装版西洋シンボル事典—キリスト教美術の記号とイメージ. 八坂書房. 東京.
- 武藤剛史(訳). 2006. キリスト教シンボル事典(文庫クセジュ). 白水社. 東京.
- 長崎県. 2006. 旅する長崎学3 キリシタン文化Ⅲ 26 聖人殉教, 島原の乱から鎖国へ. 長崎文献社. 長崎.
- 長崎県観光課. 2013.8.23(調べた日). 長崎の教会群とキリスト教関連遺産 <http://www.pref.nagasaki.jp/bunrui/kanko-kyoiku-bunka/sekaiisan/kyokaigun/>
- 長崎県教育委員会. 1976. 細石流教会. pp.109-110. 長崎のカトリック教会. 長崎県.
- 中尾佐助. 1966. 栽培植物と農耕の起源. 岩波新書.

- 岩波書店．東京．
- 中尾佐助．1978. 現代文明ふたつの源流－照葉樹林文化・硬葉樹林文化 朝日選書 110. 朝日新聞社．東京．
- 中尾佐助．1979. 照葉樹林文化の建築．建築雑誌 94(1145):11-14.
- 日本ツバキ協会(編)．2010. 最新日本ツバキ図鑑．誠文堂新光社．東京．
- 丹羽基二．1976. 家紋大図鑑．秋田書店．東京．
- 大形 徹．2012. 九州西部における隠れキリシタン後裔の花文化．人文学論集 30 : 63-89.
- オリバー, ポール(藤井明訳)．2004. 世界の住文化図鑑．東洋書林．東京．
- 新上五島町．2011. 新上五島町北魚目の文化的景観保存計画．長崎県新上五島町．有川．
- 白石ちえこ．2012. 鉄川与助の教会建築 五島列島を訪ねて．LIXIL 出版．東京．
- 鈴木 功．2003. 西海の天主堂を訪ねて．心力舎．東京．
- 田淵 論．2009. 教会堂建築 構想から献堂まで 第2版．新教出版社．東京．
- 外山三郎．1980. 長崎県植物誌．長崎県生物学会．長崎．
- 塚本洋太郎．1975. 花の美術と歴史．河出書房新社．東京．
- 上田善弘．2013. 雲南の野生バラ－気品の起源．pp.179-191. 山口裕文(編)．栽培植物の自然史Ⅱ－東アジア原産有用植物と照葉樹林帯の民族文化－．北海道大学出版会．札幌．
- 上山春平・佐々木高明・中尾佐助．1996. 続・照葉樹林文化－東アジア文化の源流．中公新書 438. 中央公論社．東京．
- 歌野 礼．2013. 十字架の島とカタシ文化．pp.229-230. 山口裕文(編)．栽培植物の自然史Ⅱ：東アジア原産有用植物と照葉樹林帯の民族文化．北海道大学出版会．札幌．
- 矢木谷涼子．2002. 日本の教会をたずねて．別冊太陽 日本のころ 119. 平凡社．東京．
- 矢木谷涼子．2004. 日本の教会をたずねてⅡ．別冊太陽 日本のころ 127. 平凡社．東京．
- 矢原徹一・浅山英一・新田あや・荒俣 宏．2002. スズラン属．pp.310-310. 堀田 満ら(編)．世界有用植物事典．平凡社．
- 山口裕文．1995. 植物と動物．pp.190-262. 満井録郎(編)．大島町郷土誌．長崎県大島町教育委員会．
- 山口裕文．2013. 西九州のカトリック教会にみられる花模様について：ツバキかバラか？ 人間・植物関係学会雑誌 13(別):14-15.
- 山本進一．2001. 対馬・龍良山照葉樹原始林の構造と動態－日本の照葉樹林の雛形として．pp.19-42. 金子務・山口裕文(編)．照葉樹林文化論の現代的展開．北海道大学図書刊行会．札幌．
- 山中二男・新田あや・平林 浩・鈴木省三・川崎寿彦・谷口幸男．2002. バラ属．pp.917-925. 堀田 満ら(編)．世界有用植物事典．平凡社．東京．
- 柳 宗民・友部 直・荒俣 宏．2002. ハアザミ(アカンサス)属．pp.33-34. 堀田 満ら(編)．世界有用植物事典．平凡社．